

コルシカ語諸方言における母音交替について

渡邊 淳也

1. はじめに¹

本稿の目的は、コルシカ語において母音交替 (svucalatura) とよばれる現象について、一般的な記述を確認したあと、『新コルシカ言語地図』(*Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 略称 NALC) に掲載されているいくつかの地図を参照して、いっそう実態に即した検討をおこなうことである。

コルシカ語の概略、ならびに方言圏の区分については前稿、渡邊 (2020) を参照されたい。コルシカ語は単一の標準語をもたず、島内の多数の方言 (地域的変種) にひとしい規範性をあたえる「多規範的」(pulinomicu) な言語である。このことから帰結するのは、地域によってことなる多数の形式を一挙に提示している、言語地図をもちいた研究の重要性である。

以下の論述は、つぎに示すような手順による。まず2節で用語を整理するとともに、概説書などで一般的にどのような記述がなされているかを確認する。つぎに3節でNALCをもちいて諸方言の事例を観察する。3.1節では *settanta* / *sittanta*、3.2節では *novembre* / *nuvembre* の事例を扱う。そのあと、4節で諸事例をまとめるとともに、考察をくわえる。

2. 母音交替に関する一般的記述

母音交替 (svucalatura) とは、接尾辞や動詞の活用語尾を語末につけることによって、もとは強勢音節に位置していた母音が、強勢をうしなうと同時に、/ɛ/、/e/ が /i/ に、そして /ɔ/、/o/ が /u/ に変化する現象のことである。おなじ現象をさして一般言語学の *apofonia* という用語をもちいる場合もあるが、どの母音からどの母音への変化であるかが決まっている点などで、*apofonia* 全般にくらべると限定されている。

また、ほかのロマンス諸語に多くみられる母音変異 (*metafonia*) とも別の現象である。母音変異は強勢音節の移動をとまなわない語尾変化につられて、強勢音節の母音も変化する現象である²。リゲーリア方言の孤島であるブニファーツィウ (Bunifaziu) の方言を例外とすれば、コル

¹ 本稿は科学研究費補助金 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者: 山村ひろみ)、ならびに同 (C) JP-20K00565 (研究代表者: 渡邊淳也) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。

² Kaze (1991, p.164) から母音変異の例を引用すると、つぎのようである。イタリアのセルヴィリャーノ (Servigliano) 方言では、*metto* [m'etto] 「わたしは置く [直説法現在]」に対し *mitti* [m'itti] 「きみは置く [直説法現在]」、*fiore* [fj'ore] 「花 [単数]」に対し *fiuri* [fj'uri] 「花 [複数]」など。

シカ語には、母音変異の事例はみられない³。

母音交替について、Dalbera-Stefanaggi (2002, p.32) から例示を借りよう。soma [s'ɔma]⁴「総計、荷物」という語から出発して、接尾辞の添加につれ、つぎのような累次的な変化がおきる。

(i) 接尾辞 -ere /'erɛ/ の追加：sumere [sum'erɛ] 「荷役の動物、ロバ」

(ii) 接尾辞 -one /'ɔnɛ/ の追加：sumirone [sumir'ɔnɛ] 「大きなロバ」

(iii) 接尾辞 -acciu /'attʃu/ の追加：sumirunacciu [sumirun'attʃu] 「大きな、ろくでもないロバ」

以上は名詞の接尾辞添加にともなう変化であるが、動詞の活用にもなう例をつけくわえるなら、mette [m'ettɛ] 「置く [不定法]」から mittemu [mitt'ɛmu] 「われわれは置く [直説法現在]」への変化や、dorme [d'ɔrmɛ] 「ねむる [不定法]」から durmemu [durm'ɛmu] 「われわれはねむる [直説法現在]」への変化などがあげられる。

この現象はたいへん広くみられるので、Durand (2003, p.108) によると、suminà [sumin'a] 「種をまく [不定法]」からの活用の際、sumenu [sum'ɛnu] 「わたしは種をまく [直説法現在]」のように、/i/ から /ɛ/ へという逆方向の変化 (Durand の所説によると、元来は過剰修正であるという) も存在するほどである。

しかし、どの程度広く母音交替の現象がみられるかは、コルシカ島内の地域間で違いがある。概略的には、島の北方ではこの現象がすくなく、南方では多いといわれる。たとえば、Papi (2017, p.53) は、「この交替は南方では規則的であるが、北方では小地域ごとに不規則である」(Cette mutation est régulière dans le sud et irrégulière dans le nord suivant ses micro-régions) としている。しかし、各方言での実際の扱いはいっそう複雑であり、より詳細な記述が必要である。

3. 『新コルシカ言語地図』(NALC) をもちいた事例研究

本節では、言語地図をもちいて子音弱化の実情の一端を確認するとともに、若干の考察をくわえることにする。使用する言語地図は、『新コルシカ言語地図』(Dalbera-Stefanaggi & Poli (dir.) (2007-2017): *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 略称 NALC) である。NALC はコルシカの言語地図として最新であり、過去最大規模 (350 地点、3500 問) の調査にもとづいて編纂されている。また、コルシカ大学のホームページの一角にある *La base de données langue corse* (略称 BDLC) で NALC のデータを検索できるほか、一部の音声資料も公開しているという利点もある。

しかし、言語地図は基礎的な (つまりは、派生を経していない) 語彙を中心としておさめているため、NALC の全体にわたって母音交替の事例をさがしたところ、残念ながら、活用形や接尾辞添加などの真に「生産的」な派生形式は採録されていないことが判明した。そこで、派生的性質は若干劣るものの、settanta / sittanta 「70」 (<sette 「7」からの派生)、および novembre / nuvembre 「11月」 (<nove 「9」からの派生) を順次とりあげてみたい。

³ Dalbera-Stefanaggi (2002, p.74)、Durand (2003, p.132) などを参照。

⁴ IPA の通則には反するが、本稿では『新コルシカ言語地図』や Culioli et alii (2009) (2010) (2012) などのコルシカ語辞典で広くおこなわれている慣習にならって、強勢記号 ' を強勢音節の直前ではなく、強勢母音の直前にする。

3.1 settanta / sittanta

言語地図上にあらわれる *settanta / sittanta* (NALC, vol.1, p.255, carta 199) の形は、おおよそつぎのように分けることができる。提示の順は北方にみられる事例が先である。

1/ [sett'anta]、[sett'anta] に類する形

母音が交替しておらず、語彙的基底形のままの形とみなすことができる。コルシカ岬半島 (Penisola di Capicorsu)、バスティーア (Bastia)⁵、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti)、ヴィワールリウ (Vivariu)、アレーリア (Aleria) など、旧南北県境⁶の北側にほとんど対応する。旧県境が方言圏と一致する例はたいへんめずらしい。ただし、アヤッチュ (Aiacciu)、マッダレーナ島 (Maddalena) は南方にあるにもかかわらず例外的にこの類に属する。前稿、渡邊 (2020) でも子音弱化に関して指摘したが、アヤッチュでおこなわれている方言的変種は周囲より北方的であることが多い。

2/ [sitt'anta] に類する形

/ɛ/ または /e/ から /i/ に母音が交替した形である。マリニャーナ (Marignana)、バステーリガ (Bastelica)、プルピアー (Prupia)、サルテー (Sartè)、ポルティウエッチュ (Portivechju) など、旧県境以南にひろく分布している。

3/ [set'aⁿta]⁷

コルシカ島最南端のブニファーツイウ (Bunifaziu) のみでみられる形式である。ブニファーツイウはジェーノヴァの植民都市であったため、リグーリア方言に類する変種が話される、「方言の孤島」である。島の他の地点ではすべて /t/ である語頭から第2の子音が、/t/ と単子音になっており、西ロマンス語的な特徴の指標になっている。

3.2 novembre / nuvembre

言語地図上にあらわれる *novembre / nuvembre* (NALC, vol.1, p.197, carta 171) の形は、北方から順に、おおよそつぎのように分けることができる。

1/ [now'ɛmbre]、[now'ɛmbre] に類する形

母音が交替していない形とみなすことができる。コルシカ岬半島 (Penisola di Capicorsu)、バスティーア (Bastia)、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti)、アレーリア (Aleria) などにみられるが、ヴィワールリウ (Vivariu)、ヴェーナグ (Venacu) などは下記の 2/ に属しているので、前節の 1/ にくらべると範囲が狭い。

⁵ 地名のカタカナ表記は、島内方言差を考慮し、なるべくそれぞれの地点ごとの発音に近づけるようつとめている。

⁶ 「高コルシカ県」(Corsica suprana; フランス語 Haute Corse) と「南コルシカ県」(Corsica suttana; フランス語 Corse du Sud) というふたつの県が 2017 年末まで存在したが、2018 年からはいずれも、かねてより存在していた全島レヴェルの「コルシカ地域共同体」(Culettività territoriale di Corsica; フランス語 Collectivité territoriale de Corse) に統合された。

⁷ 『新コルシカ言語地図』の表記上の慣習で、上つきの～は強い鼻音化をあらわすのに対し、下つきの～は (IPA の通則では「きしみ音」であるが、それとはちがって) 弱い鼻音化をあらわす。本稿では交替の起きる母音に鼻音化がかかわる例を扱わないので、鼻音化については問題としない。なお、表記の慣習については註 4 も参照。

2/ [nuw'embre]、[nɔw'embre] に類する形

/ɔ/ または /o/ から /u/ または /i/ に母音が交替した形であり、この例では母音交替をこうむった形の典型とみなされる形である。マリニャーナ (Marignana)、ヴィワーリウ (Vivariu)、ヴェーナグ (Venacu) など中部の旧県境に沿う地域にみられる。

3/ [nuw'embri]、[nɔw'embri] に類する形

2/ でみた母音交替にくわえて、語末の /ɛ/ も /i/ に交替している形である。2/ より南の広い範囲を占める。バステリーガ (Bastelica)、ブルピアー (Prupia)、サルテー (Sartè)、ポルティウエッチュ (Portivechju) などでみられる。

4/ [nuv'ɛmbri]

ブニファーツィウ (Bunifaziu) でみられる形式である。この事例に関しては、前節 3.1 でみた例とちがって、島の極南部の他の地点とのちがいがはっきりしない。リグーリア的なブニファーツィウ方言でも /o/ から /u/ への交替は多くみられ、語末の /ɛ/ も一般に /i/ に交替するため⁸、結果的に極南部の他の地点と連続しているようにみえる。

4. 考察とまとめ

前節で行なった観察の結果として、概略的な理解において往々にして仮定されがちである、つぎのふたつの二項対立を否定することになる。

1) **母音が交替する / 交替しないの二項対立ではない。** とくに 3.2 節の観察をふまえると、強勢前 (pretonicu) の音節における交替と、強勢後 (posttonicu) の音節における交替では事情がことなることを指摘するべきであろう。母音交替は典型的には強勢前の音節で半開母音・半閉母音が閉母音へと交替する現象であるが、語末もふくむ一切の非強勢位置に半開母音・半閉母音があるられないコルシカ島極南部 (ブニファーツィウを除く) の事例は、典型的な母音交替よりもいっそう交替が徹底した変種であるといえる。すなわち、極南部では、非強勢位置に生起する母音が、/a/、/i/、/u/ の3つにかぎられる、「シチーリア型母音体系」(菅田 2019, p.33) がひろがっているということである⁹。

2) **南北方言の二項対立ではない。** 上記 1) で指摘した差異が地理的にも展開していることにくわえて、3.1 節でみた母音交替と 3.2 節でみた母音交替の地理的分布の相違から明らかなように、/ɛ/、/e/ からの交替と、/ɔ/、/o/ からの交替では事情がことなる。前者の交替は旧県境の南側にかぎられるのに対し、後者の交替は旧県境より北側にもひろがっている。コルシカ語諸方言のあいだの差異が、事象によってちがった分布をしていることは一般論としてはみとめられているが、こと母音交替に関しては、他の現象も論ずるなかで軽い扱いしかされない¹⁰ せいか、南北二

⁸ たとえば、buti「樽」、pili「皮膚」(Dalbera-Stefanaggi 2002, pp.117-118) などの例を引くことができる。

⁹ Martinet 的な考えかたをするなら、この場合は /u/、/i/ という音素を認定することさえできないことになる。“Once a phoneme, always a phoneme” という標語であらわされる Bloomfield 派の考えかたとちがって、Martinet 派は実際に対立を示すことができる環境でのみ音素が存在するとする。この問題はあまりに大きく、本稿では扱う余裕がないので、Akamatsu (1989) (1995)、Martinet (1960) (1975) などを参照されたい。なお、Larson (2015) もコルシカ語の母音交替の現象を「中和」(neutrizzazione) と呼んでおり、Martinet 派との接点がある。

分論でかたづけられることが多い。

南北二分法による概略的な理解に対して指摘できるさらなる問題は、北コルシカの最大都市であるバステーアを北方の代表とみなし、南コルシカの最大都市であるアヤッチュを南方の代表とみなしている点である。これらの代表性は否定できる。とくにアヤッチュに関してはすでに指摘したとおり、周囲よりも突出して北方的な形式をもちいる傾向がある。

また、せまい意味での「母音交替」の現象と極南部の母音体系を連続的に扱う先行研究は管見のかぎり存在しないが、これらを連続体としてみることは、方言分布のグラデーションにかんがみても、記述的・理論的な両面で利点があると思われる。

これらのことをふまえて結論的にいうと、コルシカ語の母音交替に関しても、あたかもコルシカ語の「多規範性」の概念を体現するかのよう、母音交替に関しても、多層的な体系をみとめるべきであることがわかる。

参考文献

- Akamatsu, Tsutomu (1989): « Once a phoneme, always a phoneme : with special reference to neo-Bloomfieldians », *Revue roumaine de linguistique*, 34, 6, pp.555-565.
- Akamatsu, Tsutomu (1995): « The commutation test and minimal pairs », *Contextos*, 25-26, pp.13-39.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2009): *U Maiò : Dictionnaire français-corse*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2010): *U Minò : Petit dictionnaire français-corse, corsu-francese*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2012): *U Maiori : Dizziunariu corsu-francese*, D.C.L.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (1978): *Langue corse : une approche linguistique*, Klincksieck.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (1991 / 2015): *Unité et diversité des parlers corses*, Piazzola.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2001): *Essais de langue corse*, Piazzola.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2002): *La langue corse*, P.U.F. (訳書：渡邊淳也訳 (2020) : 『コルシカ語』白水社)
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José & Muriel Poli (dir.) (2007-2017): *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 4 vols., Éditions du CTHS.
- Durand, Olivier (2003): *La lingua corsa : una lotta per la lingua*, Paideia.
- Gaggioli, Ghjaseppiu (2012): *La langue corse en 23 lettres*, Albiana.
- Kaze, Jeffery W. (1991): « Metaphony and Two Models for the Description of Vowel Systems », *Phonology*, 8, 1, pp.163-170.
- Larson, Pär (2015): « Sulla “corsità” dei testi volgari della Corsica medievale (secoli XII-XV) », *Colloque de linguistique romane en l'honneur de F. D. Falcucci : Lexicographie dialectale et étymologique*.
https://www.academia.edu/39248775/Sulla_corsita%3%A0_dei_testi_volgari_della_Corsica_medievale_secoli_XII_XV_
- Martinet, André (1955 / 1970): *Économie des changements phonétiques*, Maisonneuve.
- Martinet, André (1960 / 1986): *Élément de linguistique générale*, Armand Colin.
- Martinet, André (1975): « Formalisme et réalisme en phonologie », Wolfgang C. Dressler et František V. Mareš (Hgg.): *Phonologica 1972. Akten der zweiten Internationalen Phonologie-Tagung*, Wilhelm Fink, pp.35-41.
- Melillo, Armistizio Matteo (1977): *Corsica (Profilo dei dialetti italiani, vol. 21)*, Pacini.

¹⁰ たとえば、コルシカ語学の概説書のひとつである Durand (2003) では、全 397 ページのなかで、まとまって母音交替を扱っているのは p.132 のなかほど半分だけであり、ほかには動詞の活用にもなう事例に言及している (p.104 など) にすぎない。

- Papi, Ernesto (2017): *Grammatica pratica di a lingua corsa*, Clémentine.
- Patota, Giuseppe (2004): *Lineamenti di grammatica storica dell'italiano*, Il Mulino. (訳書: 岩倉具忠監修 (2007): 『イタリア語の起源』京都大学学術出版会)
- Rizzi, Elena (1984): « L'apofonia nel dialetto di Bologna : una proposta di analisi morfofonemica », *Rivista italiana di dialettologia*, 8, pp.91-108.
- Rohlf, Gerhard (1966-1969): *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 3 vols., Giulio Einaudi.
- 菅田茂昭 (2014): 『コルシカ語基礎語彙集』大学書林.
- 菅田茂昭 (2019): 『ロマンス言語学概論』早稲田大学出版部.
- Thiers, Ghjacumu et alii (1984 / 2014): *u Muntese : Dizziunariu corsu-francese*, Albiana.
- Vincenzi, Giuseppe C. (2003): *Apofonia e metafonìa nei dialetti d'Italia*, Pàtron.
- 渡邊淳也 (2017): 『コルシカ語基本文法』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2019): 「ことば紀行 (40) コルシカ語」『パブリッシャーズ・レビュー: 白水社の本棚』79, p.6.
- 渡邊淳也 (2020): 「コルシカ語方言学の諸問題」『言語・情報・テキスト』東京大学, 27, pp.117-130.

ウェブサイト (データベース)

- BDLC. La base de données langue corse.* (<https://bdlc.univ-corse.fr/>)
- INFCOR. Banca di dati di a lingua corsa.* (<http://infor.adecec.net/>)